

沖仲士業から中国戦線へ 文筆は生涯の業

芥川賞受賞で一躍流行作家への機縁になった「糞尿譚」を初めとし、「麦と兵隊」などの兵隊三部作や「花と龍」など無数の名作を世に出した火野葦平。北九州は彼を始め、社会を大きく揺り動かした多くの作家、文芸家を生み育てた。うち火野葦平と、関

係する幾人かとのつながりを見る。火野葦平は本名玉井勝則、1906年(明治39年)12月3日、若松市出生。父は石炭の沖仲士・玉井組社長の金五郎、母マンの長男で小倉中学、早稲田大で学んだ。文筆には少年時代から熱があり小倉中学4年生の時、早くも文芸誌「揺籃」に「女賊の怨霊」という作品を、17歳の早稲田第一高等学院時代には自伝小説を執筆、19歳で童話集を初出版するなどしていた。22歳の1928年(昭和3年)、福岡歩兵第24連隊に幹部候補生として入隊。だがレーニンの書を隠し持っていたことから伍長に降格されて除隊。その前に父が玉井組を継がせようと早稲田に退学届けを出



火野葦平 (火野葦平資料の会提供)

しており、文学廃業を宣した。沖仲士業になった葦平は1931年(昭和6年)、労働組合を結成し書記長として組合員の士気を高める活動を展開。翌年には中国・上海にも石炭荷役で行った。この際である。帰国して若松駅に着いた時、なぜか警察に逮捕、留置された。書記長として荷役関係機械導入に反対するストライキを扇動したとしての措置。間もなく保釈されたが、「これを機に日本共産党、コムニズムに疑問を抱き、再び文学へ還る気持ちになった」と自筆年譜に記している。そして1934年小倉で発行されていた詩誌「とらんしつ」と加盟。同人に劉寒吉、岩下俊作らが出た。火野葦平の筆名はこの時から翌年には福岡市で発行の「九州文化」にも参加して小説を発表。この時の同人に、中村勉がいた。葦平の妹秀子の夫になり、アフガニスタン人民を救う故・中村哲氏の父である。



若き日の火野葦平三人兄弟と父や家族 (火野葦平資料の会提供)
後列左から 玉井勝則(火野葦平)、弟 雅雄、父 金五郎。前列左端 末弟の千博と妹たち

中国戦線で芥川賞授与さる

1937年(昭和12年)7月、日中戦争勃発。葦平は再び伍長として応召され出征することになった。そのころである。久留米から発行していた同人雑誌「文学会議」に参加して「糞尿譚」を書き継ぎ、9月ようやく脱稿して小倉百十四連隊に入隊。翌年3月、芥川賞受賞に決定した。小林秀雄が文芸春秋特派員として芥川賞の時計を持つ

て中国・杭州に赴き、陣中授与式で葦平に手渡した。その後、中支派遣軍報道部に転属。帰国すると軍曹に進んで「麦と兵隊」を発表。今度は原隊に復帰して広東に派遣されるなどした。その歩み、作品について、弟の故玉井雅雄(元東筑紫短大教授)はその著「兄・火野葦平私記」で、葦平が「当時、日本軍

が負けていること、戦争の暗黒面を書いてはならないなどの制約があり戦地で文学作品を書くことは不可能に近い状態だったにも拘わらず、私は『麦と兵隊』を書いた。書かずにはいられなかったからである」と話したことを紹介している。



火野葦平が生涯を閉じた、現在、北九州市文化財指定の「河伯洞」

その火野葦平は1960年(昭和35年)1月24日、若松の自宅「河伯洞」で死去した。54歳だった。前夜遅くまで来客と接していた。翌朝、秘書役が書齋で絶命している葦平を発見。心筋梗塞の診断だったが、残されたヘルスメモに「死にます、或る漠然とした不安のために。すみません。おゆるし下さい。さようなら。」との遺書が記されていた。睡眠薬による服毒で、三男史太郎氏ら子息と劉寒吉氏らが病身の母マン、妻ヨシノさんへの影響を慮って自殺であることを伏せることにした。12年後の葦平13回忌当日、ヨシノ

さんが死去。議論の末、葦平は自殺だったことを公にした。旧古河鉱業若松ビルの若宮幸二館長は「賑やかな周囲に囲まれながら、以外に孤独だったかもしれない。ある漠然とした不安とは、戦争に対する責任に、どう対処すべきかの思い、悩みもあったのではないのでしょうか。ただ、断定はできないし、敢えて、すべきでもない。作品を読み取って学ぶべきものではない」と彼の苦衷を察して言う。

北九州文化 文芸に欠かせぬ影響。 一家は平和の原点

葦平には多くの人との絆があった。彼の作品を初めて世に紹介した文芸誌「揺籃」の刊行者は阿南哲朗。戦後の1951年(昭和26年)にはその阿南を小説「動物」の主人公として登場させている。松本清張との

つながりも。清張は1952年に芥川賞を得た『或る「小倉日記」伝』がその前に週刊朝日入選後、新聞社企画部員の紹介で葦平のもとに時々行っていた。「火野さんは親切で、私の小説を出版社に紹介してくれたこともあった」と自著「半生の記」で述べ、葦平も彼の別の著作を読んで「筆致も闊達大したものではあるまいとの失礼な予測ははずれた」と感想を記している。一家の舞台でもあった河伯洞は今、北九州市指定文化財。管理人の藤本久子さん(71)は「葦平さん、父の金五郎さんをはじめ、この一家の優しさ、情の厚さ、絆の強さには感心します。うらやましい。平和の原点であるような感じがします」と話している。

シニアスタッフ 村田和夫